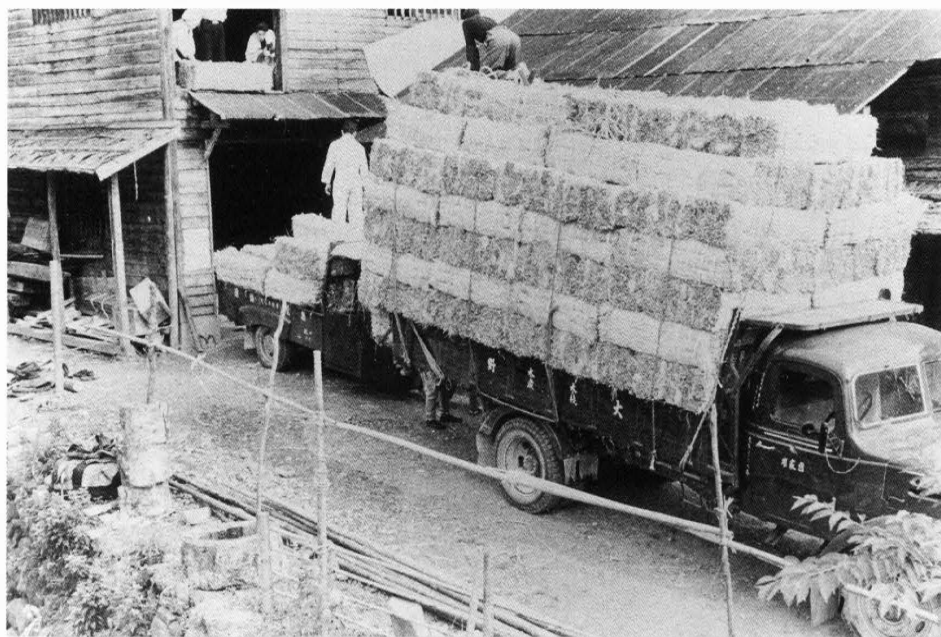


昭和35年 〜 39年

1960～1964



村の主要産物ミツマタの出荷

お山によい子の鼓笛隊

面河村洪草小2教諭の熱意実る

上浮穴郡面河村洪草小学校(友近映校長)にこのほど鼓笛隊が誕生した。五、六年生合わせて五十七人全員で編成、六年生中川利代子さんの指導杖を先頭に大太鼓、小太鼓、アコーディオン、それにたて笛が続ぎ、見事な合奏ぶりを見せている。

指導には重松勲、猪上達勇両教諭が当たり、今年の春、同校に転任以来「辺地の子供たちには何か希望を与えてやりたい」と考えて始めたもの。二期期はまず全員がたて笛を習い、さらに大太鼓、小太鼓……と教えて、このほど鼓笛隊が出来上がった。さる二十二日行なわれた同校の運動会でも、見事な行進で盛んな拍手を受けた。

(昭和36年9月28日)



洪草小学校の鼓笛隊

「武者修業」で夏に鍛える

元気に剣道の合宿

上浮穴郡久万町久万小学校剣道部(矢野計雄主任)の部員二十一人(三年生以上)は、八月六日から二泊二日間、面河村大味川城山公民館で夏季合宿練習を行い鍛えた。

六日午前八時半、剣道部主任の矢野五段錬士と担任の川崎、玉井両教諭に引率されて、全員が町役場の広報車に剣道防具、毛布などを積み込んで久万小前を出発、途中、昨年合宿した明神小に立ち寄り二時間余り練習、気合いをいれるとすぐ同校を出発、昼すぎ城山公民館に到着、同公民館のしいのみ子供会剣道部の指導者松本光夫、菅教諭明各三段や地元婦人会役員のおばさんたちに迎えられて、直ちに合宿練習に入った。

まず午後二時半から約二時間、矢野主任の指導で練習に汗を流したあと、近くの川で水浴、汗を洗い落とした。夕食には婦人会のおばさんたちが作ってくれたカレーライスを食べた。食後、川崎、玉井各教諭の指導で、夏休みの宿題や日記をつけて勉強したあと、午後九時半までキャンプファイヤーを囲んで歌や寸劇で就寝前のひとときを楽しんで過ごした。

第二日は午前六時起床、六時半からしいのみ子供会剣道部(小学三年生から中学三年生まで)の友達二十人も加わり、朝のすがすがしい空気を吸って約二時間、ともに剣道の練習に励み、朝食後約一時間自習、十時から久万小対しいのみ子供会の交歓試合大会を開き、互いに声援を送って励まし合った。

しいのみ子供会剣道部の子供たちは、わずか半日の合宿練習に加わっただけで互いの友情に堅く結ばれたが、久万小剣道部員は同日午後二時ごろ、しいのみ子供会や婦人会のおばさんたちに送られて出発、全員無事合宿練習の日程を終えて帰町した。

(昭和38年8月10日)



しいのみ子供会剣道部と仲よく練習に励む久万小剣道部の合宿訓練

全国の友達の夏休みをリレー収録

面河洪草小「臨時プール」の喜びも

上浮穴郡面河村洪草小学校(篠崎実校長)で、二学期の始まったさる九月四日、北は北海道から南は九州の奄美大島に至る、六つの小学校の友達の声のリレー式に収録した「ぼくらのなつやすみ」のプリントを校内放送して全校生徒に聞かせた。この放送は特別番組「ぼくらのなつやすみ」Ⅱ全国小学校リレー放送Ⅱのテーマで、東京都渋谷区立千駄ヶ谷小学校子供放送局が企画、司会と構成を同校が受け持ち、プリントを完成したもので、北海道有珠伊達町伊達小学校―鹿児島県名瀬市名瀬小学校―愛知県西加茂郡三好町三好南部小学校―愛媛県上浮穴郡面河村洪草小学校―青森県下北郡佐井村佐井小学校―宮崎県日南市大堂津小学校―東京千駄ヶ谷小学校へとリレー式に録音構成し、放送日を決めて全国の参加校が二斉に校内放送する仕組みで、放送時間は十五分間。

洪草小の素材は、笠方ダム工事の影響で川の水が濁って泳ぐことができなくなった、子供たちの泳ぐ場所がほしいという切実な訴えで、父兄たちが子供たちの願いを実現させるため、農林省のダム工事業所に掛け合った結果、同村の「コウゴミ」に同事業所が臨時のプールを作ってくれた。そのときの工事の様様を織り込みテープに吹き込んだもので、川をせき止めるブルドーザーの音を巧みに取り入れ、子供たちの喜びの気持ちを現わしている。素材の取り扱いは、猪上達男教諭が当たり、六年生の中川光さんほか五人の放送係の声が吹き込まれている。

なおリレー放送に出た全国各校の放送グループの友達との写真も交換されている。
(昭和37年9月9日)



全国小学校リレー放送を収録する洪草小の放送係の児童と猪上教諭



展示された2つの新聞記事をみて大喜びの子供たち

僕らのことが新聞に出た

洪草小「北から南の夏休み」

上浮穴郡面河村洪草小学校(篠崎実校長)では、放送部の掲示板に張られてある二つの新聞の切り抜きが、いま児童たちの話題の中心になっている。

一つは九月九日付の愛媛新聞中予版に掲載された『全国の友達の夏休み、リレー収録し校内放送、面河洪草小、「臨時プール」の喜びも』の見出しがついた記事の切り抜きで、二学期の初め同校で、北は北海道から南は九州の奄美大島に至る六つの小学校の友達の声のリレー式に収録した「ぼくらのなつやすみ」のプリントを校内放送して、全校生徒に聞かせたときの模様を扱ったもの。

いま一つは九月七日付けの朝日新聞東京内版に掲載された『きょう初の放送「録音「ぼくらの夏休み」」北から南六校結ぶ千駄ヶ谷小で昼休みに』の見出しがついた記事で、写真は両紙とも申し合わせたように、いずれも収録したときの声の友達録音機を囲んでいる場面を写したのが掲載されている。

千駄ヶ谷小学校は全国各地の子供放送局のキー・ステーションとして活躍、今度のリレー放送には企画、司会と構成を受け持ち、まとも役を務めたわけ。録音テープを交換しあつた小学校は洪草小のほか、伊達小(北海道)、佐井小(青森県)、三好南部小(愛知県)、大堂津小(宮崎県)、名瀬小(奄美大島)の五校。いずれも収録したときの記念写真や地方色豊かな絵はがきを送つてきており、新聞の切り抜きと並べ展示され、子供たちの人気を集めている。

猪上教諭は「こんどのリレー放送の記事が新聞に掲載されたことで、子供はもちろん父兄たちの喜びも格別だったし、各方面から多数激励の手紙をもらうなど、意外に反響が大きいのに驚きました。また子供たちは二つの記事を見くらべて、自分らも都会の子供と同じことができるのだという自信をいっそう深めていますし、全国の友達とじかに対面したのと同じ喜びを感じているようです」と語っている。

(昭和37年9月30日)

笠方ダムから化石

253百万年前の植物

上浮穴郡面河村笠方ダムの現場で、このほど二百万年から三百万年以前のもものとみられる植物の化石が多数発見され、同時代の植物分布を知る研究資料として県立博物館に保存された。

化石はいずれも同村市石のトンネル工事現場、地下十一二十メートルのところから発見されたもので、工事関係者が県に持ち帰ったもののうち十七点が同博物館に収められた。同博物館の調べによると、発見された地域は新生代第三紀層で、化石は和泉砂岩からできている。化石になつてはいる植物の多くはモミジ、ウリノキのような落葉広葉樹で、中にはススキなども混じつてはいる。

(昭和36年9月3日)



笠方ダム工事中に発見された化石



豊作を祝う面河村の秋祭り

ユーモラスなダイバ

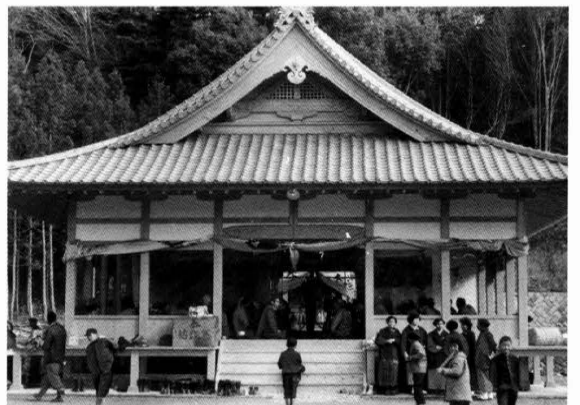
久万お山の秋祭り終わる

うらかな小春日和に恵まれた十月十八日、上浮穴郡面河村は久万郷最後の秋祭りのできわたった。

同日は午前十時ころから村内の洪草、面河、本組などのミコシが威勢よく氏子の家々を巡り、名物の「ダイバ」も真つ赤なお面にシユロのひげをつけて、ユーモアたっぷりなしぐさで魔よけをして歩いた。久万郷では四日の久万祭りから始まって、美川村、柳谷村と五穀の豊作を祝ってきたが、同日の面河祭りで秋祭りも幕を閉じた。

祭り酒でござげんのお百姓さんは「若者がいないので寂しい祭りだ。それでも豊作を祝い家内安全を祝つて村中祭り一色ですよ」と語っていた。

(昭和37年11月20日)



新築落成した八社神社

「八社様」りっぱに完成

面河笠方公民館も新しく

上浮穴郡面河村八社神社と笠方公民館の新築落成式は、二日午前十時から八社神社で日野笠方部落会長、小椋笠方ダム公共補償委員長、工事関係者、来賓などが出席して盛大に行なわれた。神事のあともちまき、小学生の鼓笛隊演奏などがあり、午後は新公民館で演芸会が開かれた。

八社神社、笠方公民館はともに、農林省が施行している笠方ダム建設地点にあつたのを西北約四百メートル離れた山の中腹に移転、新築したもの。八社神社の拝殿は木造平屋建て瓦ぶき、神殿は木造銅板ぶきで総工費八百一十六万円。公民館は木造スレートぶき平屋建て(二四〇・九平方メートル)で総工費四百三十五万円。(昭和37年12月5日)

成功した開田工事

今年から稲作りで増収

上浮穴郡面河村栃原の開田工事八ヶ村がこのほど完工、「今年から田植えができる」と地元の家では大喜び。

この開田事業は大正年間からの同地区の懸案事業だったが、当時は機械動力がなかったため今まで延び延びになっていたもの。昨年七月総工費千八百五十万円を着工、資金の八割は農林漁業金融公庫から借り受け、二割は二十戸の農家で出したが、資金返済は三年据え置き十五年年賦。

この開田地帯はもともと山畑で、トウモロコシその他の雑穀しか採れず、十ヶ村当たりの収入は五千円ほど。それも大風などがあると収穫皆無という憂き目もたびたびみえてきたが、これを水田にして稲を植えると、十ヶ村当たり平均三百六十キとみても二万四千円は上がる。

この中から少しづつ事業費を返還していきこうという方針で、水路も幹線六百ヶ村のほか、支線四千ヶ村を付けている。新しく水田の持ち主となった二十戸の農家では「開田も共同でやったのだから、苗代づくりも共同でやろう」と苗代づくりも共同作業。また耕運機二台も共同購入するという意気込みで、笠方ダムにより水没した水田十五ヶ村も「これでいくらかでも取り戻せる」と表情は明るい。

(昭和35年5月26日)



面河村栃原に完成した開田地帯

面河村城山公民館完成

生活改善のセンターに

上浮穴郡面河村大味川の城山公民館は、元城山小学校跡にさる六月着工、総工費三百万円で見積り進めていたが、このほど完成、十七日落成式を盛大に行なった。建物延べ三七九・五平方、敷地約一九八〇平方の木造平屋建て。同公民館は特に広い炊事場(四九・五平方)が作られ婦人会などの料理講習にも使われる予定。

また日本間二間があり、大広間は床の間付きの明るい部屋で、冠婚葬祭はもちろん一般家庭にも開放し、生活改善の一助にもする方針といわれる。

(昭和35年8月24日)



完成の城山公民館

関門の駐車場完成

大型バス50台はOK

観光地面河溪(上浮穴郡面河村)の入り口関門にこのほど、大型バス五十台が駐車できる県営の駐車場が完成した。県が総工費千五百万円を投じ、さる三月十日着工以来工事を進めていたもので、長雨などで工事が遅れ、最近ようやく完成したものだ。

この工事は山を削り取った土を県道沿いの面河川の川底に埋め立て、高さ約五メートルのコンクリート土台を作り、その上にコンクリートブロックで壁を築いた高さ七・五メートル、長さ百六十メートルのすつきりしたもので、頑丈でスマートなガードレールが取り付けられ、国定公園の名勝地にふさわしい近代的な感覚の駐車場。

既設の駐車場が最大限三十台余りしか駐車できなかつたため、この駐車場の完成によって、観光シーズンごとに悩まされていた駐車難による混雑が解消されることになった。(昭和38年8月15日)



完成した面河溪関門の県営駐車場

重見前村長の胸像除幕

上浮穴郡面河村前村長、故重見丈太郎氏の胸像除幕式は、二十一日午前十二時から同村洪草の面河中若葉寮前の建立地で、青木面河村長、重見未亡人タケさん(七)ら遺族、来賓ら約七十人が参列して行なわれた。

故重見前村長の孫の家久絵里ちゃん(八)がテープを切つて除幕したあとと神事があつた。青木村長、高田村議長らが故人の遺業をたたえる式辞を述べ、遺族を代表して重見庄三郎氏(重見丈太郎氏長男)が感謝の言葉を述べた。

胸像は像の高さ約七十センチ、台石の高さ二メートル五十五センチ、幅七十五センチで、台石は岡山県産の方成と呼ぶ特製の御影石で作られたりっぱなもので、重見氏の功績を長くたたえるため村費で建てた。

(昭和39年3月24日)



故重見氏の胸像除幕式

開拓地シリーズ③ 面河村割石

養蚕振興を柱に

豪雪が敵 ほしい医師

海拔千四百五十メートルの石墨山の山懐、標高八百五十メートルの高冷地、上浮穴郡面河村割石開拓地は、割石川の上流道前道後平野を潤す笠方ダム貯水池から約四キロ松山よりの地点にある。同村と松山市を結ぶ県道（面河―川内線）から約二百メートル上がった盆地状の日照り、地味ともによく、比較的立地条件に恵まれたところ。

現在十世帯五十人が入植しているが、いずれも村内の農家出身者ばかりの集まりで、入植は県下でもっとも遅かったといわれ、割石農協組合長の篠原岩雄さん（五）と篠原実さん（三）の二世帯が三十二年三月で、あとの八世帯はいずれも三十四年春入植したもの。

入植後結婚したのは二世帯、子供は小学校に併設の幼児学級園児が三人、小学児童七人、中学生五人のほか乳幼児が五人いる。世帯主のほとんどが三、四十歳から五十歳代の働きざかりの人たちばかり、従って中年の主婦が多く、夫唱婦随の古いタイプの雰囲気何となくかがわられた。

学童のいる家庭では通学距離が遠いのが悩みの種。開拓地から笠方小まで約四キロ、近道を通学しても子供の足で四十分以上はかかる。特に困るのは冬季の積雪、昨年は三メートル以上の豪雪で、約五十日間は穴倉生活が続ぎ、住家は押しつぶされそうになるし、人は栄養失調で通学どころではなかったという。平年でも厳寒期は、バスが積雪の

ほか道路の凍結で運行ができなくなるので、約十キロも離れた面河中学に通学する中学生は冬季の二、三カ月の間は寮に入る。

ラジオは全戸にあるが、今のところテレビのあるのは二戸くらいで新聞を取っているところも二、三戸くらいしかなく、娯楽といえばラジオを聞くか巡回映画を見るくらいだという。家族総出で炭焼きや木材運搬、材木作業などの農外現金収入を求めて働きに出るこの開拓地の人たちは、農閑期を利用しての営農研究やレクリエーション、主婦の学習活動などはまったく見られない。しかし婦人会活動などは全然やっていたわけではなく、水没した笠方地区の中心部を失ってから下火になったままで、友田、松原などの中心部では、水没前まではかなり盛んで、開拓地の婦人たちもしばしば活動に参加していたという。新設の笠方公民館に近く公民館婦人部が設けられ、公民館活動の一環として発足予定で、開拓地の婦人たちにもよき学習の場が与えられるのも近い。

この開拓地に電灯がついたのは三十四年。八軒が入植したところで、電話も維持費負担を交換条件に、通話があつた際連絡を依頼、呼び出してもらうことにしており、県道から約七十メートル下の農家にある地区外農村電話を共用している。

いま開拓地で何より欲しいのは一本の農道である。農道が付けば桑の運搬はもちろん、野菜の出荷など作業はすべて能率的になる。農機具は耕運機二台を購入、共同で使用している。便利なのは水利で、石墨山から発する谷川の清流の水を引き、自家用水にする一方、自然の貯水池が各所にあつて、一部には小規模のマスの養殖もやっている

ほど恵まれたところだという。

いちばん困るのは医療面。へき地だけに、十キロ以上も離れた村の中心地波草地区にある医師一人の診療所が頼りだが、割石開拓地のある主婦は「昨年ごろ、当時小学校六年生の三女が急病で医師に往診を求めたが、間にあわず死んでしまった。病院へ連れてゆくこともできぬ状態だったので途方にくれ、往診を依頼したのだが、すぐにきてもらえず助からなかった」と訴えている。

開墾地は合わせて二十四軒、入植当初はソバ、トウモロコシ、大豆、小豆などの雑穀やバレイシヨなどを作るかたわら、二戸二頭くらいの肥育牛を全戸で飼育していたが、その後ハクサイ、ホウレン草、キャベツ、ミノワセダイコンなどを始めた。野菜作りは生産価格が不安定で、時には運賃だけ足さねばならぬこともあつて引き合わないし、肥育牛も昨年の豪雪のときなど、牛がやせ衰えて餓死寸前の状態に陥った苦い経験から、今冬は全戸で五、六頭しか飼っていない。つまり牛を飼うのは春から夏にかけてだけというわけ。

同開拓地では村や農協の指導援助で、三十七年に六・五鈴の桑園を作り、昨年春から養蚕を手がけており、同年は三百二十五グラム（春五十、夏二百、秋七十五グラム）を掃き立て、収繭量九千七百五十キログラム、約七十八万円の初収穫をあげた。そのうえ同年夏はミノワセダイコンの売れ行きがよく、三万二千七百キログラムを出荷、五十八万八千円の収益をあげた。昨年は豪雪につぐ台風などで傷めつけられたにもかかわらず、養蚕とミノワセダイコンの成果に力を得た開拓地の人たちは、桑園を新たに三・八鈴増反して、三年生分合わせて十二鈴に



稚蚕共同飼育所に集まった開拓地の人たち

し、この桑で予想収穫量四千七百キ、二百六十万円の収益をあげ、さらに五年後には収穫量反当り百キ以上、金額にして少なくとも六万円の収益をあげようとの意気込みで、養蚕二本を頼みのつえとして目標目指して突き進んでいる。

篠原割石開拓農協組合長は「主食の自給自足もできぬ開拓地で生きる道はただひとつ。当面手掛けている養蚕あるのみで、契約出荷により流通面の心配がない養蚕を柱に、労力配分上に都合のよいミノワセダイコン作りの二本立てでいきたい」と語っている。

高岡面河村経済課長は「今年も養蚕振興に本腰を入れており、割石開拓地には最近稚蚕共同飼育所と七十アリの稚蚕桑園を作って養蚕奨励に努めているが、今後さらに資金を調達して、早急に壮蚕共同飼育所も設けて施設を充実すると同時に、技術の向上を図って、割石開拓地を村の養蚕振興の中心地帯にまで発展させたい」と強調している。

これに対し久万農業改良普及所では「今後農道を整備して経営の合理化を図り、技術を研さんすれば、畜産を中核として標高八百五十メートルの高冷地特有の立地条件を生かしたイチゴ苗や花作りのほか高級野菜を生産。開拓地を横切り松山市に通じる県道を活用すれば、将来養蚕本に頼らなくても開拓地の生きる道は開けるのではないか」との見通しを述べているが、いずれを進むにしても、開拓地の前途は決して生易しいものでないことだけは確かなようだ。

(昭和39年2月2日)

いま盛りお山の田植え

お山の田植えは早い。上浮穴郡の山間地では平地より一カ月も早く、今が田植えの真つ最中。褐色に覆われていた山肌も、五月の半ばになると緑が燃え立つ。山の向こうには真つ白な雲が顔を出し、陽光は暖かそうだが、谷間を渡る風はまだうすら寒く、水温は冷たいときは六、七度。きれいな田の水に早乙女の素足が赤く凍える。水温が低く日照り時間が短い。そこでできるだけ早く植えて稲の生育期間を少しでも長くしようというのがこの早植え栽培で、早いところでは八月末にはもう刈り入れにかかるころもある。

(昭和35年5月22日)

久万高原にも秋色

稲、クリの作柄も上々

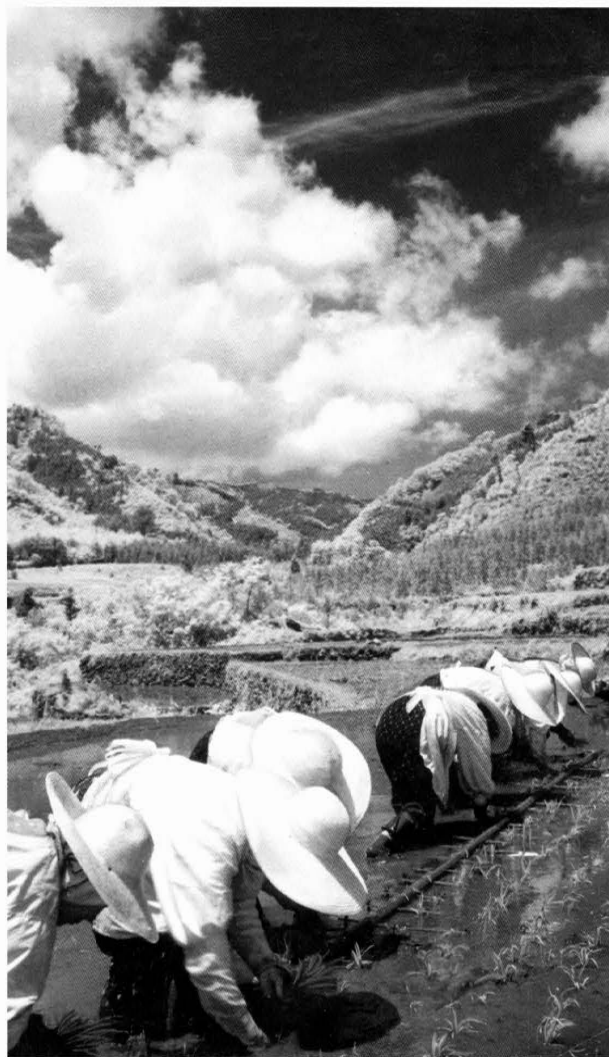
久万高原にひと足早い実りの秋がやってきた。ここ上浮穴地方は八月も終わりに近づく朝夕はめつきり冷え込み、いつしか集^まり始めたコオロギの声とともにすっかり秋の気配。

秋の味覚、上浮穴地方特産のクリは、はち切れんばかりに枝もたわわに実って、忍び寄る秋の訪れを告げ、早くも高原に秋色を漂わしている。

(昭和38年8月23日)



はち切れるように実ったクリ(面河村大味川で)



山あいの田植え風景

清流にべつ甲の形

国定公園面河溪関門から約一キロ、海拔六百八十メートルに位置する高度百メートル、幅二百メートルの渓谷中随一の断崖。カメの腹そっくりなのは造化の妙。断崖の名称はずばり「亀腹」。ヒヤリと冷感を誘う岩肌はまるで巨大なカメが腹を見せている格好。べつ甲のように重厚で滑らかだ。頂上からの眺めはスリルを好む現代人も肝を冷やすばかり。

すそを流れる渓流の冷たさはまた格別。足を漬けるだけでももう冷たさが全身に快く伝わる。まさに浮世はなれたカッパ天国。とうとうと流れる清流は河床の岩をかんで砕け、白い波頭を作って冷涼さを増す。春から初夏にかけてのアメノウオ釣り、初夏はツツジ、秋はまたモミジが断崖を飾り、行楽客の目を奪う。家族連れや団体が弁当を広げてくつろぐ絶好の場でもある。

(昭和36年8月13日)



面河溪亀腹

87億円の大事業

面河ダム盛大に起工式

上浮穴郡面河村笠方に作られる面河ダムの建設を中心とする、農林省道前道後平野農業水利事業、県営発電事業、県営工業用水道事業の起工式が、十月十二日午前九時から農林省と県の共催で、ダム建設現場で神事によるくわ入れ式が行なわれた。

式場には小林国司農林省農地局建設部設計課長（農林大臣代理）、久松県知事、川戸孟紀岡山農地事務局長、中島県農林水産部長、高岡面河村長、それに水没者代表の日野団平さん（商業）、建設業者代表ら関係者約百人が集まり、工事の早期完成を祈願した。このあと午後一時から四時まで松山市堀之内の県民館で祝賀会を開き、県会議員、会社、官公庁、約七百五十人が参加して盛大に行なわれた。

これら二連の開発事業は、総工費八十七億円を投じる本県始まつて以来の大事業で、三十八年度完工の予定。式辞を述べた久松知事は「さる二十六年にこの大事業の計画を立てて以来、十年ぶりに着工の運びになったのはうれしい。このような事業は補償問題がからんで計画どおり進まないものだが、水没者の理解ある態度をはじめ関係者の協力で、予期以上に早く工事に取っかかりたい」と喜びを述べた。溝淵高知県知事など多方面から祝辞が寄せられた。

このダムは、有効貯水量二千六百万立方メートル、長径約二・五キロ、短径約一キロ、満水面積百二十四畝という大規模なもので、完成すれば用水不

足に悩む道前道後平野に引水して約二万二千畝の耕地のかんがい役立ち、五千五百トンの米の増収が可能で、農業経営の合理化と農業生産の向上が期待される。また松山市、伊予郡松前町の工業地帯への工業用水の確保、導水中の落差を利用しての水力発電にも役立つことになっている。

このダム工事で、八十四世帯と笠方小学校、面河農協笠方支所、八社神社などが湖底に沈むことになるが、補償問題はすでに円満解決しており、農民たちのほとんどは松山市や温泉郡方面で新天地を求めて移転も完了している。

（昭和35年10月13日）



くわ入れをする久松知事

笠方ダムいよいよ本格工事

来月からコンクリート打ち込み

上浮穴郡面河村笠方に農林省が五カ年計画で、総工費八十七億円を投じ昨年十月着工した道前道後水利総合開発事業のダム工事は、その後順調に進み、九月末には仮設備工事を完了、ダム基礎掘削も九〇％終わり、十二月初めにはコンクリートの打ち込みが始まり、本格的な工事が行なわれる段階となった。

仮設備による機械の据え付け完了に伴い、近く機械の試運転が行なわれる。完成すれば道前道後平野（十五市町村）二万二千畝の耕地を潤し、五千五百トンの米の増収が可能となるほか、松山市、伊予郡、周桑郡壬生川町などの工業地帯への工業用水が確保され、導水中の落差を利用して三つの水力発電所が作られ、電力の供給も行なわれることになる。

（昭和36年10月7日）



機械設備工事が完了したダム建設現場と採石山

1月、待望の送水

3年がかり尊い4人の犠牲

「愛媛の愛知用水」といわれ、道前道後水利総合開発事業の要となる面河ダム（上浮穴郡面河村）がほぼ完成、十一月六日から放水路を閉め切って貯水を始めた。この総合開発事業は農業用水と発電と工業用水供給を合わせた県始まって以来の大事業で、農林省でも現在行なわれている農業水利事業ではもっとも力を入れており、道前道後平野の農業の飛躍的發展と中予の工業發展の推進力となるとして期待されているもの。

面河ダムは高さ七三・五メートル、長さ百五六・〇メートル、有効貯水量二千六百八十万立方メートルで、三十五年十月に着工、農林省と県公営事業局の手で約二十億円の事業費と三年以上の年月をかけ、また四人の尊い犠牲者を出してほぼ完成をみた。

道前道後水利事務所は十一月中旬にダムの高さ四十メートル付近まで貯水し、来年一月中旬から送水を始める一方、あと八千立方メートルのコンクリート打ち込みとダム操作施設などダム関係の工事を来年三月末までに終え、来年秋ごろダムを満水にする。満水になれば百二十五メートル近い田畑山林と笠方小学校など公共施設も含めて、友田地区と笠方地区の一部八十七戸が水没する。

（昭和38年11月7日）



貯水を始めた面河ダム

県が計画 関西屈指の観光圏に

車に乗って40～50分

車に乗って四、五十分、石鎚山系の雄大な眺めを家族連れで楽しめる。大観光道路「石鎚スカイライン」を県が計画、道路公団に調査の陳情をしているが、予定のコースの初調査が四月二十六日行なわれた。

県から桑山土木部長、本間道路課長、門屋観光課長補佐らと、予定コースの沿線の西条市、上浮穴郡面河村、周桑郡小松町などから関係者が参加、十亀石鎚山岳会長の案内で、一行十四人が約三十キロの山道を踏みしめて調査した。同ラインの予定コース、面河村関門から西条市の西之川までを二日ばかりで調査したが、二、三方所の難コースを除いて、ほとんど技術的に問題がないことが分かった。

県の計画では、幅六メートルの道コースによって二十五キロから三十一キロまで作るが、難所はトンネルか橋を架けて傾斜を緩やかにする計画。総工費約十五億円が見込まれているが、スカイラインが完成すれば、関西一の最高峰石鎚山とその山系を千数百メートルのところから展望できる。コースの長さ、雄大さでは全国有数のものとなる。また山中にうっそうと立つ木材も車で大量に早く出され、山林資源の開発が飛躍的に伸びる。

二十七日は調査団を交え、西条市、面河村、小松町、温泉郡川内町の関係者が集まり、西条市で石鎚スカイライン期成同盟会（会長、村上西条市長）を結成し、道路公団に早く調査にかかるよう強力に運動を進めることにした。現在石鎚山には年間約三十万人が登っているが、スカイラインが数年後に完成すれば約百五十万人の登山者が見込まれ、車でダフルと国定公園石鎚東側を半周できるほか、面河溪谷、奥道後、笠方ダム、川内ゴルフ場など二大観光ルートをゆつたり楽しむことができ、関西きつての大きな観光圏になろう。それだけに関係者はぜひ実現したいと意気込んでいる。（昭和37年4月29日）



スカイラインの頂上、土小屋で予定コースの状況を検討する調査隊